

大阪市淀川区 「NPO法人スイスイ・すていしょん」丸山敏夫さんの思い

お話

いただいた方

「NPO法人スイスイ・すていしょん」メンバー

「みんなであそぼう」実行委員長 丸山 敏夫 さん

大阪市淀川区社会福祉協議会 吉田 ひろみ さん・西川 美紀 さん

インタビュー・ライター：大阪大学大学院経済学研究科 大阪府こども食堂ネットワーク 西山
 撮影：認定NPO法人全国こども食堂支援センター・むすびえ 圓藤

地域の中にこどもたちが集まることのできる場所ができれば、それでいい。
 地域のつながりを縦にも横にもつないでいく「淀川区こどもの居場所ネットワーク」の取り組みと挑戦についてうかがいました。

長年の活動をさらに進化させて

「かしまスイスイこども食堂」を始めたきっかけを教えてくださいませんか？

丸山さん

僕は淀川区加島にある「スイスイ・すていしょん」というNPOのメンバーです。“スイスイ”というのは、水平社の“スイ”からきています。1974年、英語教師として中学校に赴任して、教え子と関わる中で「部落差別」や「解放運動」について教えてもらうようになりました。教え子が「スイスイ・すていしょん」の活動の中心を担うようになり、僕もそこに参加させてもらっています。スイスイは、地域でいろんなことに取り組んできていたので、こども食堂も「うちもやってみようか」という雰囲気ではじめました。初めの頃のこども食堂は「こどもの貧困対策」などいろいろな定義でされていたので、スイスイで始める時には、大阪市内のいくつかのこども食堂を見学し、仲間内で議論もしました。でも、結局「あまり難しいこと言わんと、“こどもの集まる場所”を提供したらいいんじゃないか」「やってみて課題が見つかれば、それに取り組んでいこう」になる、対象者を狭めず、「来たい子は来たらええ」という緩やかなやり方で、こども同士のつながりを作る場所にしようということになりました。

「かしまスイスイ子ども食堂」の活動と

子どもたちの様子を教えてくださいませんか？

丸山さん こども食堂は、月1回、地域の団地にある集会所を借りて開催しています。最初は少し広めのところを借りて始めたんですが、そこが使えなくなってしまって、今の集会所に移動しました。調理を含めて5〜6人のメンバーで活動していて、メニューは管理栄養士のメンバーが考えてくれています。毎回60〜70食、多いときは80食作ります。

西川さん スイスイのこども食堂は、始まる前になると、たくさん子どもたちが並んで待っていて、終わった後も集会所の前で元気に遊んでいるのが印象的です。こども同士グループで来た子は、お茶で乾杯なんかして、すごくリラックスしている様子で、「おばちゃん、おかわり！」「これいらん…」など、こどもらしい姿も見せてくれます(^^)

丸山さん 僕がこども食堂の活動に参加している一番の理由は、こどもたちの相手をしていると面白いし、楽しいからです。中にはやっぱり「この子、ちょっとどうなんだろう」とって心配になる子もいて、先生から頼まれて、お弁当を届けています。大阪ではこどもの学力低下が心配されていますが、学校だけで「勉強しなさい」と言うだけでは、こどもたちのモチベーションを上げることは難しいと思います。こどもが勉強するためには、それぞれのこどもの家庭のことも理解して、学校と親と地域がつながり、こどもに寄り添うことが必要だと思っています。スイスイのこども食堂には、時々、学校の先生も来て、一緒にこどもたちのことを見てくれています。そういうことが大事だと思います。

西川さん 先生が来ると、「せんせーい！」「何とか先生や！」みたいな感じで、こどもたちもすごく喜ぶんですね。



つながりがつながりを作る

「こどもの居場所ネットワーク」と

イベント「みんなであそぼう！」について教えてください☆

西川さん 淀川区の「こども居場所ネットワーク」は、淀川区社会福祉協議会が淀川区役所・淀川区まちづくりセンターと協働して開催している「淀川区民福祉のつどい」がきっかけで立ち上がりました。2017年の福祉のつどいで、当時、区内で活動していたこども食堂の方々に実践報告をしていたくことになり、初めてこども食堂同士が集まりました。そこでの出会いをきっかけに、こども食堂同士のつながりを続けたいということになり、現在も2か月に1回の交流会を続けています。2023年度と2024年度には、ネットワークの活動から派生して、こども食堂の皆さんと一緒に「こども食堂」や「こどもの居場所」を知ってもらうためのイベント「みんなであそぼう！」を開催し、丸山さんには、その実行委員長を務めていただきました(^^) 2025年度も「みんなであそぼう！」を開催しようとして、前回の交流会で皆さんと一緒に決めたところです。



丸山さん イベントといっても、最初の年は、僕たちは当日会場に行って、それぞれのコーナーの担当をするだけでした。でも、2024年度には、ネットワークの中から10～13人くらいの有志で実行委員会を作って、出し物や役割分担をみんなで話し合いながら進めていきました。話し合いを重ねる中で「あれもしてみたら？これもしてみたらどう」と、アイデアがどんどん膨らんでいきました。実行委員会は、交流会の後や別の日に集まってやってきたんですが、こども食堂同士のつながりが深まって、自分たちが中心になって取り組むことの大切さに改めて気づきました。開催が近づくにつれて、挨拶要員として実行委員長決めなあかん、ということで、僕が実行委員長になった感じなのですが、実行委員会が積極的に活動できたのは、ネットワークの事務局が社会福祉協議会の中にきっちりと拠点としてあって、支援してくれて、安心できたからだと思います。

吉田さん 2024年度は、実行委員会の皆さんが自発的に自分の得意としていることから「うちがこれができるよ」「私のところはこれやるわ」というふうに積極的に決めていってくださって、私たち事務局がひとつひとつお願いしなくてもよい状況でイベントを開催することができました。当日の運営も「もっとこうしたらいいんじゃないか」と考えながらやっていただいたので、本当に私たちは会場の設定だけに集中することができました(^^)

丸山さん 2024年度は実行委員会形式でやりだした最初の年なので、いろいろと話し合わないといけないことが多く、実行委員会の回数も多かったように思いますが、原案ができたので、次からはそれに基づいて展開していくことができると思います。原案がどんどん進化していくのは、いいけど、形骸化してはいけないなとも思います。とりあえず形ができたことで、それぞれの団体が年間予定にこのイベントを入れようになったのは、よかった点ですね。

西川さん 2024年度はSDG s もコンセプトの1つにして、費用を抑えて開催しました。こどもたちに渡す参加賞のお菓子や景品は寄付金などを活用して少し準備しましたが、区内にさまざまなコンセプトで活動する居場所が増えたので、費用をかけずに楽しむアイディアをネットワークの皆さんから幅広く出していただいたように思います。例えば、薬局の空箱を使った工作やゲームをクリアしたらもらえる手作りの金メダル、紙鉄砲づくりやブンブンゴマづくりなど、こどもたちは自分で何かを作ることや、大人が真剣に一緒に遊んでくれることを楽しんでいて、こどもも大人も生き生きしている様子が印象的でした。その中で「こどもの居場所ネットワーク」のブースも出しましたが、人手が足りず、区内のこども食堂やこどもの居場所について「こういうところがありますよ」という紹介に、十分につなげられなかったことは反省しています。

吉田さん 事務局としては、「みんなであそぼう!」のような親子向けのイベントは、こども食堂や社会福祉協議会が主催でやっていることをお伝えしても、「社協（社会福祉協議会）ってなんですか?」という親御さんも多く、「怪しいんじゃないか」「めちゃめちゃお金取られるんじゃないか」という不安があるかもしれないなとも思いました。より安心して親子が参加できるよう、開催に向けて、社協として区役所へ協力をお願いしたところ、区役所のブースを出していただくことができました。区役所のブースは万博がテーマで、そこでやってくださったガチャガチャはけっこう人気がありましたよ(^^)





人を巻き込み、資源が循環する地域

これから「こども居場所ネットワーク」は、どうになっていくのでしょうか？

丸山さん 僕もいいかげん歳なので、体力的にもしんどくなってきて、いつまで関わっていられるかなと思うことがあります。今のスイスイを見て、もし僕がいなかったら誰がどうするかな…と思うと心配になります。どこの団体も、既存の行事を行うだけでかつかつなんじゃないでしょうか。こども食堂も地域のメンバー5〜6人でなんとかやっていて、もっと若い人が関わってくれるといいのですが、現役で仕事をしている人が、こども食堂や交流会に出てくるのは余裕がないのではないかと思います。中学生や高校生を実行委員会に巻き込んだり、僕らみたいに退職して時間的に余裕のある人に声をかけたりすることも考えないといけないと思います。そもそも地域に人が少なくなっている中で、何か活動を持続していこうとすると、いかに人材を確保するかは大きな課題だと思います。

西川さん たしかに、人材の確保という点でいうと、社協にボランティア登録に来てくれる方もいますが、社協自体をご存じない方も多いので、もっと地域にアピールしていかないといけないと思います。

吉田さん 淀川区では、区内の企業からの寄付で「こどもレスキュー事業」という独自の事業を立ち上げて、子育て世帯への支援に力を入れているんですが、自分たちの地域で何かをしたいと思っている企業は多いので、積極的に協力しています。この事業ではつながりを作ることを大切にしている。物品をお渡しする際も、必ず顔を見てお話をしながらお渡しします。会話を大事するなかで把握した生活状況によっては、一緒にこども食堂に行って、地域みなさんと食事をし、地域とのつながりを作らせてもらうこともあります。企業寄付は、ニーズに応じた自由度の高い活動を応援していただけるので、そういう企業とのつながりも増やしていきたいと思っています。

西川さん 企業からの物品寄付でも、配布先がなければ、申し出を断らざるえない地域もあるかと思います。でも私たちは「こどもの居場所ネットワーク」や「こどもレスキュー事業」を通じて、確実に配布することができるので、寄付をお断りすることはありません。まだまだ課題はありますが、地域内で資源の循環を生み出すことができていると思うので、これをさらに発展していければと思っています。

